川上　高司　ブログ　アーカイヴ

2016年

2月15日

おもしろくなってきた共和党レース

アメリカでかなり徹底的に過激な抗議行動を取ることで有名な反戦団体「コード・ピンク」が思いもよらない候補を絶賛している。コード・ピンクは、議会の公聴会でもしばしば過激な抗議行動をして妨害し強制退去させられたこともある行動派で、14年間イラク戦争に反対してきた。その彼らがこともあろうか共和党候補のドナルド・トランプに喝采を送った。トランプが、共和党討論会でイラク戦争批判を展開したからである。

13 日に CBS ニュースで放映された共和党候補による討論会ではドナルド・トランプはイラク戦争は「間違いではすまない。最悪の大失敗だった」と言い、ジョージ・ブッシュが CIA の情報に耳を貸さずあるはずもない大量破壊兵器をあると言い張ってアメリカを戦争の泥沼に陥れたと厳しく批判した。トランプによればブッシュ大統領は「うそつき」で「弾劾すべきだった」とさらにエスカレートしていく。そしてイラク戦争につぎ込んだ多額の戦費を国内のインフラ整備に使うべきだったと民主党のような批判を展開した。

そのトランプに対してジェブ・ブッシュは「我が家への批判にはうんざりだ。父や兄は立派な人物だ」と反論したが、もはや説得力はない。ジェブの人気が最悪なのは、国民が兄ブッシュの業績にうんざりしているからに他ならない。トランプの発言は物議を醸すことも多いが、国民の本音を代弁していることも少なくない。だからこそ高い支持を得ているといえる。超保守と言われるトランプだが、実業家らしく超リアリストが本当の姿かもしれない。なにしろロシアのプーチン大統領が「彼とは話が合いそうだ」と好感を得ているのである。

トランプの人気が持続すればするほど、他の共和党候補はより保守的にならざらるを得ない。彼らが偏れば偏るほど民主党に有利になる。トランプの狙いはそこにあるのかもしれない。いよいよ大統領選挙がおもしろくなってきた。

2月21日

期待するのは有言実行の「変化」

共和党大統領候補レースで、早々にジェブ・ブッシュが撤退を表明した。圧倒的なトランプの人気の前に泡沫候補となりもはや挽回の余地はなかった。ブッシュはもともと出馬する意志があまりなかったが周囲の説得で立ち上がったにすぎない。

2 番手を争うのはマルコ・ルビーオとテッド・クルーズとなった。サウスカロライナでの予備選挙ではトランプが圧勝したが、その勝因をＣＮＮ出口調査から検討してみたい。

サウスカロライナでは、トランプは男性の３５％の支持を得た。ルビーオが２２％、クルーズが２４％だった。女性の得票はトランプが２８％、ルビーオとクルーズが２４％とそれほど差がない。どうやらトランプは女性にはあまり受けないようである。

興味深いのは、トランプが保守派にはあまり人気がないということである。トランプは超保守派の支持は２７％だったが、実はクルーズは３７％とダントツだった。一方中道派の支持はトランプは３２％を得ている。ルビーオが２５％、クルーズが８％という結果を考えるとトランプを支持したのは、穏健保守から中道派という意外な結果が出た。

大統領にふさわしいと思われているのはルビーオ（４９％）であり、トランプはふさわしいとは思われていない。だが、４３％の有権者がトランプが「変化」をもたらしてくれると期待している。次の大統領に期待するものは経験（４８％）と型破り（４７％）がほぼ拮抗していることからわかるように、国民は変化を求めている。8年前「変化」を訴えて当選したオバマ大統領だったが、現実にはなにも変わっていないではないか。そんな中道派の不満が、言いたい放題まさに型破りのトランプへの支持に繋がっている。そうであれば、中道を取り込むことができるトランプにも大統領の可能性が高まることになる。民主党候補がクリントンであれサンダースであれ予想外に苦戦するかもしれない。

2月23日

有言実行が試されるシリア停戦

国際シリアサポート会議（ISSG）が 1 月末からアメリカとロシアの共同議長により進められていた。いろいろな思惑が絡み、参加国であるトルコがロシア戦闘機を撃墜するなど参加国の間でも不協和音が響きその会議の成り行きが注目されていた。

それでも 2 月 22 日、アメリカとロシアが停戦で合意したと発表されケリー長官が「絵に描いた餅にならないようにする」と前向きな意欲を見せた。

この合意は「敵意を休止」するという停戦合意である。2 月 26 日正午までに各武装勢力はアメリカかロシアに停戦を受け入れるかどうかを通告、受け入れるという通告のあった武装勢力は攻撃対象からはずすという。ただしＩＳとアル・ヌスラはその対象外で攻撃を継続するというものだ。

この通告という行為によりにより米露側は武装勢力を把握し彼らとホットラインで繋がることを目指すのだが、その実効性にはすでに疑問符がつけられている。なにしろ 5 年も戦闘してきた地域である。それほど簡単に武装グループは停戦を受け入れるだろうか。さらに武装勢力は米露という大国の思惑に疑心暗鬼であり、本当の狙いはどこにあるのかと不信感が募っている。

この米露の停戦合意は唐突だった。2 月 21 日、ロシアはイランに国防大臣を派遣した。これは今回の停戦合意の了承をイランのロハニ大統領から得るためだとみられている。そして 22 日にはオバマ大統領とプーチン大統領が電話で協議し、その直後に発表された。その発表に先立つ週末にはロシアのラブロフ外相とケリー国務長官は密室会談を重ねていた。まさに個人対個人の外交交渉で停戦合意にこぎつけたのである。

このケリー・ラブロフの密な関係とオバマとプーチンの一対一の外交交渉がシリ

ア問題を進展させる原動力であるということがはっきりと表れている。現在の米露関係はここに集約されている。